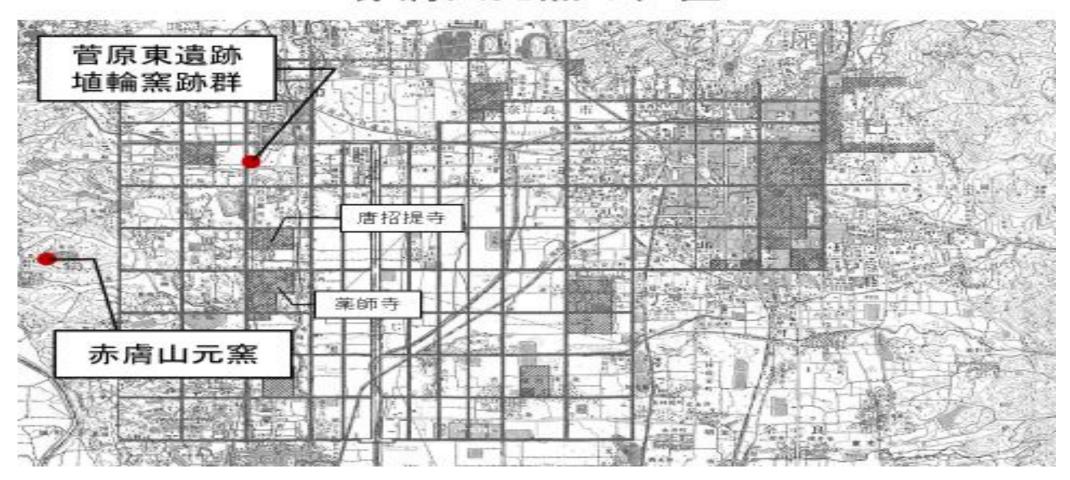
# 赤膚山元窯 八代 古瀬堯三

今、あなたと生きる奈良の伝統文化遺産 赤膚焼と赤膚山元窯

## 平城京近辺 土師氏の里

赤膚山元窯の位置



## 土師氏の里=焼き物に携わる一族の里



### 赤膚山から望む奈良の町



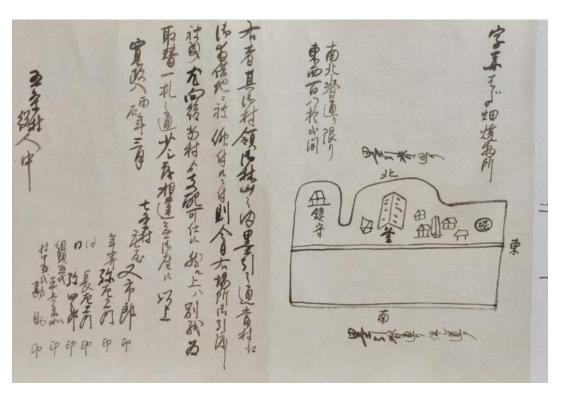
### 赤膚焼のはじまり

- ・大和郡山城主 豊臣秀長(秀吉の弟)が常滑より陶工 与九郎を招き 窯を開かせたのがはじまり。
- ・赤膚焼は江戸幕府が開かれるより16世紀後半、長篠の戦いや本能寺変がおきた天正年間がはじまり。
- その後、豊臣家と赤膚焼は衰退してゆく。

### 赤膚山元窯 古瀬堯三の歴史

- ・江戸時代後期(18世紀) 大和郡山藩当主 柳澤保光侯(堯山侯) により京都より赤膚山元窯の祖治兵衛を招き赤膚焼が再興される。
- ・その後 赤膚三窯 東の窯 中の窯 西の窯に分立
- ・中の窯はのち赤膚山元窯となる。





## 赤膚山元窯記念碑の由来



### 赤膚山元窯後援会 役員

男爵 水栗柳楠高田田 横横大大外磯 谷 河河 田沢瀬草辺沢川井内内狩野 有保日平加良毅半信正素信 心 磨庵承年助丸夫郎郎敏敏庵威

## 昭和8年 赤膚山元窯全景画



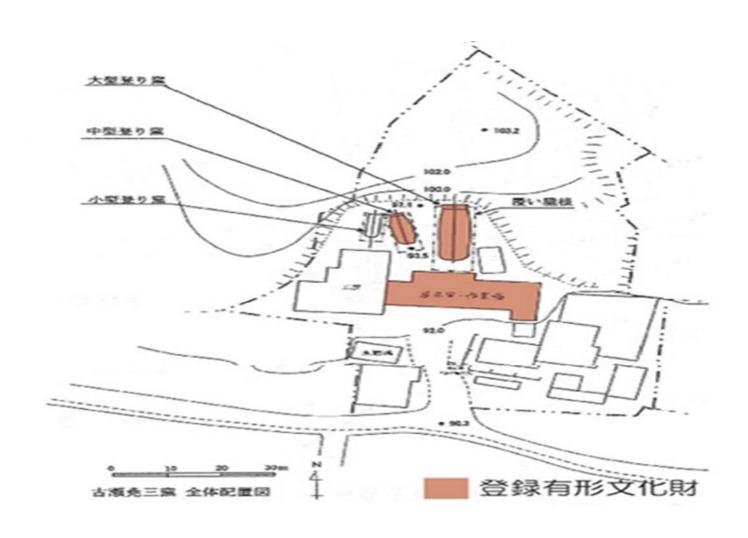




## 赤膚山元窯 昭和30年代頃



## 赤膚山元窯全体図



### 赤膚山元窯 施設紹介

登録有形文化財 赤 膚 山元 窯展 示室 及び 旧作業場明治後期 / 昭和17年増築



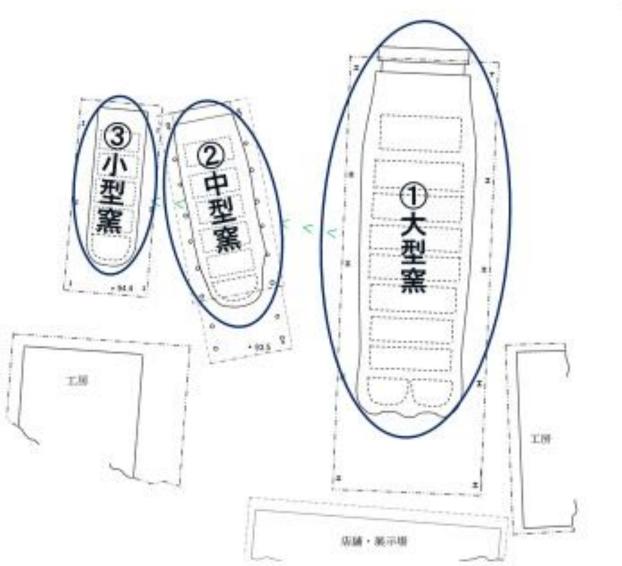
市西部の丘陵地に位置する。桁行12間、梁間3間規模の切妻造、東西棟で、東南隅に茶室を突出し、南面及び西面には庇を架ける。真壁造とし、当初作業場として使われていた西半分には格子窓を設ける。居住空間と窯を結ぶ敷地の要となる建造物。



## 登録有形文化財 陳列場2階 トラス構造



#### 赤膚山元窯の特徴・価値

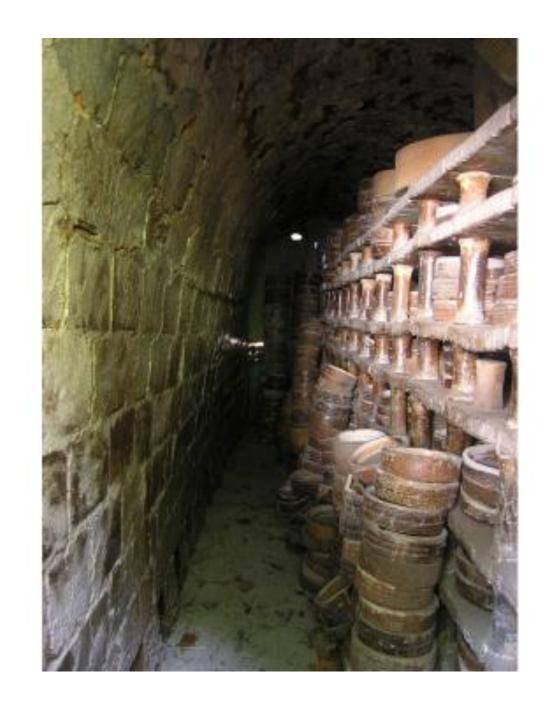






敷地北側の傾斜地を利用して南北に築かれる。2連の胴木間と8房の焼成室が連なり 最上部に煙道を設ける連房式登窯。奥行18m、幅5.4m、高さ6m規模で、煉瓦造とし、 表面を塗土で仕上げる。勾配は3寸、上部で緩勾配に変化。近世に遡る大規模な登窯。

### 大型窯内部



## 大型登り窯 6の間

大型窯内部



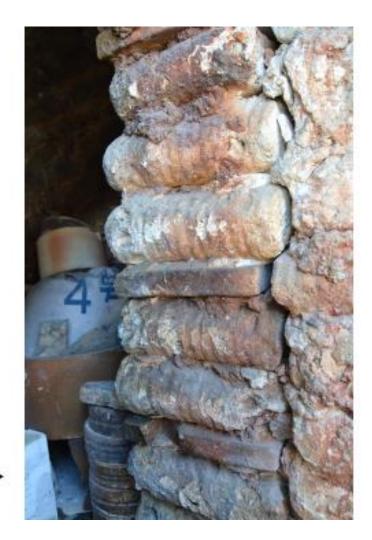
#### さまざまな煉瓦が使用されている6の間





大型窯とほぼ並列して築かれる。焚き口となる胴木間と5房の焼成室が連なる連房式 登窯で、奥行9.7m、幅3.3m、高さ4.4m規模。煉瓦造とし、表面は塗土で仕上げる。規 模は異なるが、近世に築かれた大型窯と同様の構法を用いて築かれる。

### 中型窯でも古い煉瓦を再利用し新しい窯を築かれている



手形のついたレンガ▶

### 中型窯の煉瓦

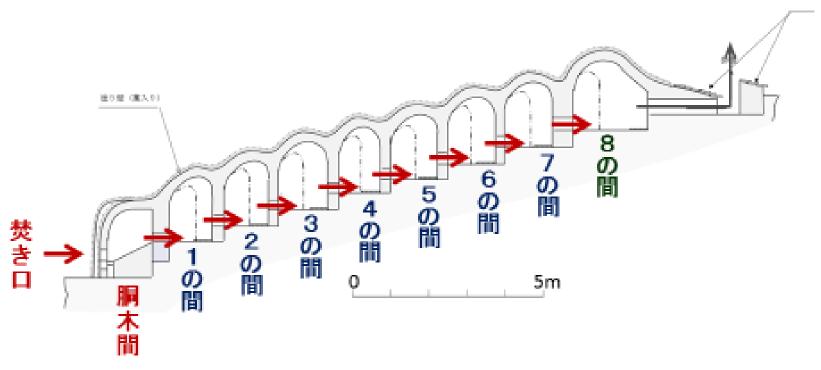






#### 連房式登り窯とは

房=焼成室(やきものを焼く小部屋)



#### 赤膚山元窯の特徴・価値

#### 3つの登り窯が並んで残る

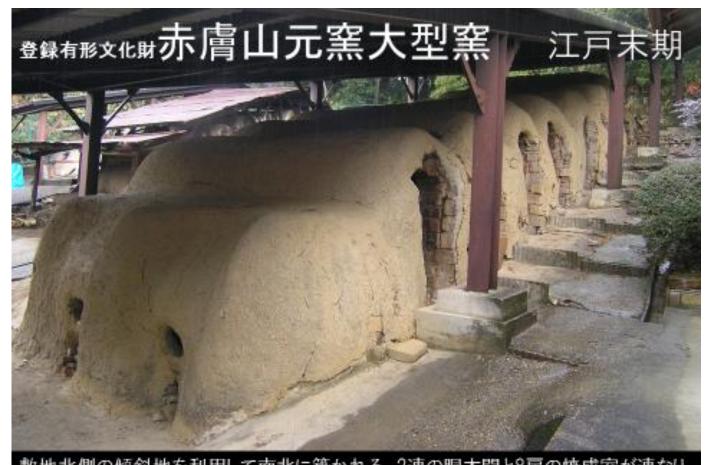
- 3つの登り窯が並んで残るのは、全国的にも珍しい
- 登り窯小型化の歴史的な移り変わりをよく示す

#### 地産地消の焼物生産

- 付近産出の粘土を裏山で保管、敷地内の水簸場で 精製、釉薬も自家調整、広場や工房などを含め、原 料から製品までの一連の工程を行える場を今も確保
- 江戸時代から続くこのような生産体制を保持している 窯元は全国的にも珍しい
- ・ 窯道具、土型、ろくろ等、多くの道具も現存



### 平成27年度 大型登り窯保存活用事業がはじまる



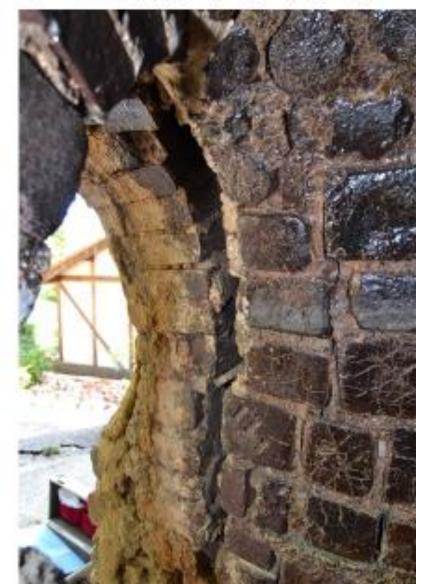
敷地北側の傾斜地を利用して南北に築かれる。2連の胴木間と8房の焼成室が連なり 最上部に煙道を設ける連房式登窯。奥行18m、幅5.4m、高さ6m規模で、煉瓦造とし、 表面を塗土で仕上げる。勾配は3寸、上部で緩勾配に変化。近世に遡る大規模な登窯。







## 大型窯破損状況



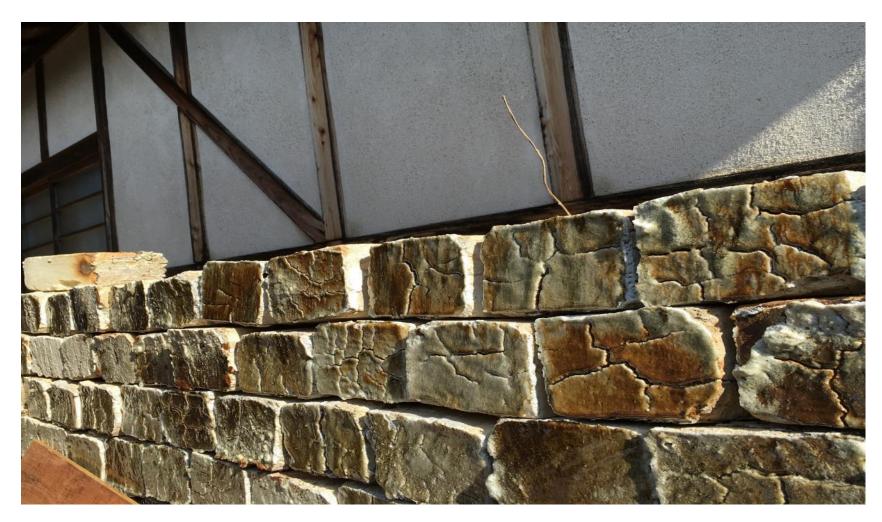
#### 平成27年 9月より大型登り窯解体修理発掘調査が開始







#### 大型登り窯1~2間の使われていたレンガを再利用の為保管 縦約17センチ 横約24センチ 奥行き約14センチ 重さ約12キロ



### 修理に伴う調査



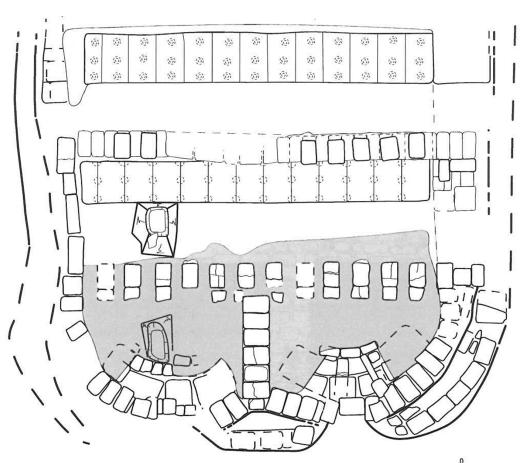


(昭和18年) 金属回収記念

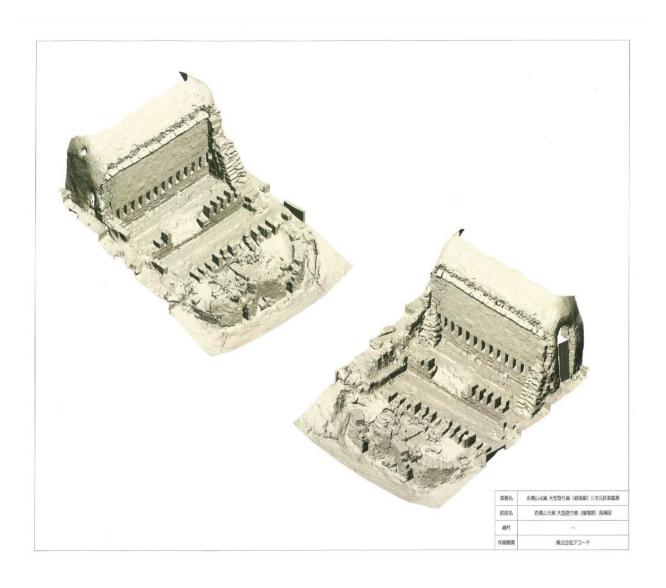


### 調査時の状況





## 赤膚山元窯 3次元計測図





## 組立



#### 平成28年度 登り窯修理工事 6月6日~6月20日





二の間と三の間の境目。





解体時出てきた煉瓦を 再利用し貼り付け作業が 進む。





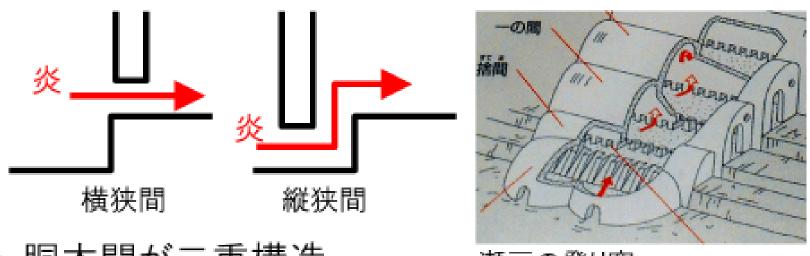


## 土壁を塗りもとの姿に戻す作業



### 明らかになったこと

 全体に京式 + 瀬戸式が加わる (横狭間→京式、胴木間2つ→瀬戸式)



• 胴木間が二重構造

- 瀬戸の登り窯
- 今の床面の下に別の床面(かさ上げして築き直す)
- 胴木間~3の間までは新しく、4の間以降は古い

### 大型登り窯解体発掘調査

- 築窯以降、レンガの積み直しをはじめとする改修や改造、部材の更新などが繰り返して何度もおこなわれてきた。
- ・ 瀬戸式と京式の両方の特徴を持つ。
- 8部屋あるうち、4の部屋後方の壁部材が前方より古い時期のものが使われている。
- ・赤膚焼は、京都系の窯と言われているが、いろいろな地域の陶工が入り、時代の要請に応じて変化してきている。

